



農村居住の持続性と震災復興に関する研究

山崎, 寿一

(Citation)

農村計画学会誌, 31(2):184-184

(Issue Date)

2012-09-30

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003048>



農村居住の持続性と震災復興に関する研究

山 崎 寿 一*

2012 年はいろいろな意味で区切りの年になりました。今回の農村計画学会賞の授賞はその象徴です。

私は、1957 年 5 月に金沢市に生まれ、1976 年に神戸大学に新設された環境計画学科（現在、建築学科に再編）に入学しました。そして 1979 年 4 月、4 年生の時に早川和男先生、重村力先生の指導する生活環境計画研究室（EN 3 講座）に所属することになり研究をスタートさせました。私は、生活の視点に立った環境形成が、生活環境計画の真髄であり、生活（LIFE）には、生命、人生の意味を含む概念として強く意識して使っています。

私の研究の本格スタートは、1982 年に博士後期課程に進学してからで、丁度その年に、農村計画学会が設立されました。その年に早川和男先生を代表とする日生財団の「生活環境資源としての第一次産業的土地利用の役割に関する研究」、重村先生との「四国山村・中久保集落研究」、故地井昭夫先生との「輪島市海士町一舩倉島の海女漁村の二拠点居住の研究」がスタートしました。それから 30 年です。

今回の農村計画学会賞（論文）の題目は、「農村居住の持続性と震災復興に関する研究」です。この研究は、現代社会が持続可能な社会形成・環境形成を課題とするなかで、農村がもつ持続性の論理と特質を明らかにし、農村計画の新たなパラダイム構築を目指した研究としてまとめたものです。

私の震災復興研究は、集落居住と集落空間構造の研究が土台となっています。またそれは、卒業論文以来取り組んできた都市と農村の共生に関する研究、コミュニティ空間計画の研究から継続する関心の延長上にあります。

震災研究と集落居住、集落空間構造、都市農村共生の研究が結び付いたのは、阪神淡路大震災の研究であり、その後の農村計画学会、建築学会の活動です。阪神淡路大震災では、子供が親の故郷で避難生活をする「被災疎開」と集落の伝統的な空間・社会構造を活かした「集落発展型復興計画」の研究に取り組みました。前者は家族の居住形態に着目した都市と農村の共生に関する研究で、後者は集落のコミュニティに着目した集落空間格の研究です。阪神淡路大震災時の建築学会農村計画委員会の委員長は地井昭夫先生、近畿支部農村計画部会の主査

*神戸大学

は富樫顕先生で、私は幹事でした。その後の中越地震・能登半島地震時の農村計画委員長は伊藤庸一先生（元農村計画学会副会長）で、伊藤先生が委員長を務めた集落復興特別委員会の幹事が私でした。これらの経験から、2011 年 4 月に農村計画学会での東日本大震災の緊急シンポの企画（資料）が生まれました。

今回の授賞論文の契機は、東日本大震災にあり、研究のコアとなったのは、2007 年の能登半島地震・被災集落の住宅・集落復興の 3 本の論文です（居住を核としたイエと集落の持続性の研究、集落を主体とした震災復興と地域性の研究、通世代定住と空地問題の研究）。そして学会賞の授賞は東日本大震災に対する学会活動への貢献が評価されたのではないかと推測しております。

2003 年に富田正彦先生、森下郁子先生、重村力先生、小林慎太郎先生、武内和彦先生らが企画された国際シンポジウム「多様性の中に循環型社会の未来を探る」（SSDE2003）の実行委員会に入れていただき、広田純一先生や星野敏先生らとご一緒させていただきました。それが契機となって、故藍沢宏先生（第 11 期農村計画学会会長）のお誘いで農村計画学会（理事）や学術会議農村計画研連の活動に参加するようになりました。

30 年はあっというまに過ぎました。早川先生を通じて白砂剛二先生、そして三村浩史先生、さらに住宅研究会・住宅会議での多くの方との出会い、重村先生を通じて地井昭夫先生、平井秀一さんをはじめとする吉阪研の方々との出会い、建築学会農村計画委員会の諸先生方との出会いがありました。神戸大学、その後の豊橋技術科学大学、大阪市立大学、建築学会、農村計画学会での出会い、すべて貴重な財産であり、私の誇りです。

今回の授賞論文は、これまでの研究成果を集大成したものではなく、これから集落居住の持続性の原理の探求と集落の社会・空間構造の生成に向けた本格的な研究に取り組む意思表示のつもりでまとめたものです。「原理追求と創造」それが農村計画、建築・地域計画研究の根幹であり、両者の結合がこの分野の学術的に固有な課題でだと思っています。

最後になりますが、家族、恩師、郷里、そして私の存在と環境を支えてくださった方々に感謝する次第です。